

## 民話「鬼の一夜城」

いちやじょう

むかしむかし、海からおよそ一里ほど山に入った所に鬼が住んでおってな、時々人里に現れてはわるさをしたりして村人を困らせてばかりいたような。

ある日のこと、大きな鬼が村人に「ここに城をつくらせてくれ。」と言ってきたんだと。

「そがあなことしてもらったらいけん。」と断ったものの、鬼は何とかして造りたいもんだから村の観音様の所に相談に行ったんだと。

観音様は「困ったの一」と思いあぐね、「夜が明けるまでに造るなら許してやるわい。」と申しつけたような。

鬼は喜んで仲間を集め、大はりきりで近くの山から岩を運び城の土台づくりに取りかかってしまった。何しろ大鬼ですごい力持ち、「こりゃあ本当に夜明けまでに城を造ってしまうかもしれん、困ったの一、何かええ方法はないもんか」と思案したげな。

「そうじゃ、いい案がある」と手を打ち、村人を呼び「いいか、朝が来てまにあわなかったと鬼に思わせるけ一。むしろを竹でたたいてにわたりの羽の音を立てる者、鳴き声のまねをする者などにわかれ、鬼が近づいてきたところでやるんじやぞ。」と言い渡したんだと。

そんなこととは知らず鬼は「もう少しで出来あがるぞ」とえっさ、えっさと岩を運んでいた。

突然暗やみの中から「バタバター」と鳥の羽のような音が、そして「コケッコー」とにわたりの鳴き声がしてきたからもうびっくり。

「ありゃーしもうた。もう夜が明けた。まに合わんかった。」と、つかんでいた大きな岩を投げ捨てて一目散に逃げて行ったような。



鬼が必死で力をふりしぼって運んだらしく、硬い岩には大きな親指の跡が、そして横に人差し指、中指、薬指、小指と五本の指跡がくっきりと残ったんだと。

その穴の中には村人が観音様やお地藏さんをまつて、鬼を退散させたことに感謝しているんだと。

またいつのころかわからんだが、この岩のことを「鬼岩」、近くで耕作をしている人達は親しみをこめ「かんのんさん」というようになり、この村を「鬼村」というようになったんだと。

さてさて、逃げ帰った鬼はこれまで村人に悪さばかりしたことを悔いて山にこもったような。そしてそれからは悪霊や災害などから村を守り、力持ちの優しい鬼になったんだと。

おしまい。

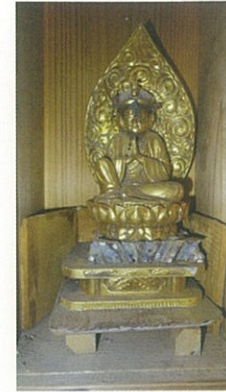
## 観音堂

鬼岩上部近くにある大きくぼみの中の祠(ほくら)に馬頭観音像と赤子地藏がまつられています。



## ばとうかんのん 馬頭観音

石こうの産地であった鬼村鉦山(1967年閉山)で採掘が最盛期の1922年頃に、石こうを積み出し港まで運搬していた馬車業者が通行などの安全を祈願して寄進。高さ25cmの木製座像で頭部に小さな馬が飾られています。



## 赤子仏

高さ40cm余の石像。鬼岩近くの狭い谷合から毎夜泣き声がかかることから、鬼岩に仏をまつり霊を供養したところ泣き声がしなくなったそうです。

また乳のたりない母親に乳が授かるようになったことから若い母親がお参りするようになったとも伝えられています。



## かんのんさん供養

毎年お盆の8月15日、鬼岩近くで耕作をしている家の人が輪番で世話をし、供養が行なわれています。

近年は、地元の自治会が草刈りなど周辺環境整備を行ない、供養も祠の前から市道近くの東屋で行なうなど高齢化に伴い伝統行事の継承に工夫をこらしています。



大屋神楽社中  
演目「鬼岩」

